

事業のタネシート

活動地域・団体名：熊本県、南阿蘇村

事業名称 1：草原再生に向けた草原維持システムの構築

あらすじ

社会状況の変化に伴い、草原維持に必要な野焼きの担い手不足が深刻になっている。将来にわたって野焼きを継続するためには、新たな草原維持の仕組みを構築することが必要。そこで、草原維持に必要な資金を確保するため、草原を資源として活用する新たな草原維持システムの構築を目指す。

ストーリー

阿蘇の草原は、国内最大規模を誇る面積を有しており、採草・放牧・野焼きによって、千年以上にわたって人々の手によって維持管理されてきた。その結果、2013年5月に世界農業遺産、2014年9月に世界ジオパークに認定されるなど、阿蘇の草原は国際的にも高い評価を受けている。しかし、過疎化・高齢化の進行に伴う野焼きの担い手不足に加え、熊本地震による牧野被害などにより、野焼きを休止した牧野もあり、地元住民やボランティアだけで草原を維持していくことは困難になってきた。

そのため、草原自体を資源と捉え、新たな価値を創出することにより、草原維持に必要な資金を確保する新たな草原維持システムを構築する。具体的には、草原を茅葺屋根の茅材として販売し、それによって生まれた収益を草原の維持管理費用に充当する。これにより、都会から地方への資金循環の仕組みを構築し、地域資源を保全することができるようになる。

事業の骨子		現時点で想定される 課題・ボトルネック
①ありたい未来	草原・自然景観の維持による地域振興	地元牧野組合等の理解を深める 他、茅材の安定的な販売先確保 が必要。
②課題	野焼きの担い手不足→草原維持の危機、草原面積減少 自然景観（草原）維持に向けた資金確保	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	過疎化・高齢化が進む中、野焼きの担い手不足により、草原を維持していくことが難しくなっている状況。そのため、草原を資源として活用し、草原維持に向けた資金を確保することで、新たな草原維持の仕組みを構築する。 草原を維持することにより、雄大な草原景観を求めた観光客の増加等に寄与し、地域活性化につながる。	
④地域資源	広大な草原景観、草原自体	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	これまで資源として活用されていなかった草原（ススキ）を、茅葺屋根の茅材として提供する	
⑥担い手（Who）	公益財団法人阿蘇グリーンストック、地元牧野組合等	
⑦事業で生じる循環	草原の資源化：地域資源（草原）→商品売却（茅材）→資金確保（草原維持） 草原の維持：地域資源（草原景観）→観光業活性化（観光客増加）→地域活性化	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像 カヤ材の販売に協力してもらえる牧野組合。
⑧事業で生じる成果	草原を資源と捉え、それによって生まれた利益を草原の維持管理に活用することで、都会から地方への資金循環の仕組みを構築できる。また、これまで見過ごされてきた草原自体が収入源となることを周知することにより、草原を維持していく必要性を実感してもらう。 また、阿蘇の雄大な自然景観を維持することにより、観光客の増加も期待でき、熊本地震の影響により影響を受けた観光業の活性化にも寄与することとなる。	

事業名称 2 : 地域資源を活用した特産品の開発

あらすじ

南阿蘇村の豊富な湧水などを活用し、村を代表する特産品の開発を行う。南阿蘇ブランドを確立することにより、新たなビジネスの創出を行うとともに、湧水などの地域資源保全に向けた意識の醸成を目指す。

ストーリー

豊かな自然や豊富な湧水を有する南阿蘇村において、これらの地域資源を活用し、新たな南阿蘇ブランドの特産品を開発する。これにより、新たな産業の創出や雇用の確保を行うとともに、農家の所得向上や都市との交流促進を図り、地域活性化を実現させる。
 具体的には、湧水を利用したヤマメの養殖や、冷涼な気候を活かした珈琲の栽培を行う。
 このうち、ヤマメの養殖については、南阿蘇村の湧水で育てた稚魚を海で養殖し、「南国ニジマス」として商品化することを予定している。また、珈琲については、既に村内で栽培を始めており、野草堆肥などを活用した、希少な国産珈琲として少量ではあるが、商品化を行っている。
 このような取り組みを拡大し、新たな南阿蘇ブランドを確立することにより、都市圏からの資金流入も見込まれ、地域活性化を図る。

事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	地域資源を活用した新たなビジネスの創出	特産品を量産化するため、どのように事業を拡大していくのか。 地域資源を活用した特産品にどのように付加価値を付け、ブランド化していくのか。
②課題	地域資源の潜在的なポテンシャルを活用できる仕組みづくり 地域内での産業創出や雇用の確保（人口流出の抑制）	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	南阿蘇村は豊かな湧水や冷涼な気候など、大きなポテンシャルを有しているが、これらを活用する仕組みが不十分である。そのため、これらを活用し、新たなビジネスを創出することにより、地域内での雇用確保などを進め、地域活性化を図る。 また、地域資源を活用したビジネスを展開することにより、村民自らが地域資源の重要性に気付き、環境保全に向けた意識を持ってもらうことも狙いの一つ。	
④地域資源	豊かな湧水、冷涼な気候、地熱などの再生可能エネルギー	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	地域内ではあまり意識されていなかった地域資源を活用し、都市圏の住民向けに、安全・安心な食品などを提供する	
⑥担い手（Who）	地元住民、後藤コーヒーファーム	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	地域資源（湧水、冷涼な気候）→特産品の生産（ヤマメ、珈琲）→資金（特産品売上）	事業拡大に向けた関連事業者。ブランド化に向けた、マーケティングの専門家。
⑧事業で生じる成果	地域資源を活用した特産品の開発により、地域内での産業創出や雇用確保につなげ、地域活性化を実現する。 また、村民にとっては当たり前のように存在している地域資源がビジネスにつながることを理解してもらうことにより、村民自らが地域資源の保全（環境保全）に取り組む機運を醸成する。	

事業名称 3 : 再生可能エネルギー活用による脱炭素化事業

あらすじ

温泉施設が多い南阿蘇村では、温泉を加温するため、灯油ボイラーを使用している施設が多く、地域外にエネルギー資金が流出している。そのため、温泉加温に地域資源を活かした再生可能エネルギーを活用し、脱炭素社会の実現と地域経済循環の向上を図る。

ストーリー

南阿蘇村の温泉施設では、温泉を加温するため多量の灯油を使用しており、地域外へエネルギー資金が流出している状態。そこで、間伐材や木工所の端材などを燃料とした木質バイオマスボイラーを導入することにより、エネルギー資金の地域外流出を防ぎ、脱炭素社会の実現につなげる。
これにより、これまで資源とならなかった間伐材や端材などを資源として活用することができ、エネルギー自給率の向上にもつながる。

事業の骨子

現時点で想定される
課題・ボトルネック

①ありたい未来	エネルギーの地産地消が進み、脱炭素社会の実現に近づいた社会	採算性が未定であること。 木材などを安定的に供給できるか。
②課題	脱炭素社会の実現・CO ₂ 削減 エネルギー資金の地域外流出の抑制	
③なぜこの事業をやるのか (Why)	南阿蘇村の主要な産業の一つである温泉施設において、化石燃料を多量に消費しており、地域外に燃料購入費用が流出している。化石燃料の代わりに、地域資源を活用することができれば、燃料購入費用の地域内循環が実現でき、また、それが再生可能エネルギーであれば、脱炭素社会の実現にも寄与することとなる。	
④地域資源	間伐材、木材 (端材)	
⑤商品・サービスの具体的な内容 (What)	温泉施設で利用している灯油ボイラーの代わりに、地域資源を活用した木質バイオマスボイラーを使用する。	
⑥担い手 (Who)	南阿蘇村、(株) あそ望の郷みなみあそ	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	地域資源 (間伐材、端材) → 熱エネルギー (木質バイオマスボイラー) → 資金 (熱エネルギー購入費)	再生可能エネルギーに積極的に取り組む事業者。
⑧事業で生じる成果	これまで地域外に流出していた燃料購入費用が、地域内で循環するようになり、新たな産業の創出にもつながる可能性がある。 また、化石燃料の使用を抑えることで、脱炭素社会の実現にも寄与する。	